
学内活動報告

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究 7
P.67-73 (2019)

本学部におけるアクティブラーニング実施状況について ～FD委員会報告～

About Active Learning enforcement at the Faculty of Health Science and Nursing Juntendo University ~ Report of the FD Committee ~

浦川 加代子* 門脇 玲子* 小川 典子*
URAKAWA Kayoko KADOWAKI Reiko OGAWA Noriko
佐野 知世* 高橋 智子*
SANO Tomoyo TAKAHASHI Tomoko

要 旨

2017年度に担当した授業科目（実習を除く）に関して、本学部専任教員を対象にアクティブラーニング実施状況調査を実施した。専任教員35名中21名（60.0%）から回答があった。結果は、担当科目数合計90、アクティブラーニングを実施している科目数合計73で、講義科目に関して導入率は81%であった。アクティブラーニング実施状況調査では、具体的内容、評価、課題について自由記述で回答を求めたので、その結果を報告する。

索引用語：アクティブラーニング、実施状況、質問紙調査、授業、専任教員
Key words：Active learning, Enforcement, Questionnaire survey, Lesson, Faculty

I. はじめに

本学部では、8月2日(木)第9回FD研修会「アクティブ・ラーニングの実践報告(1)」をテーマに開催した。実習および演習科目については、少人数を対象にクリティカルシンキングを促す教育方法であるため、学生が能動的に学習しなければならないことからアクティブラーニングを100%実施している。しかし、講義科目に関してのアクティブラーニングの状況については、担当者がどのような内容で実施しているかを把握できていなかった。そのため、FD委員会では研修

会のテーマに関連して、本学部におけるアクティブ・ラーニングの実施状況について調査を実施した。

II. 調査の目的

本学部においてアクティブ・ラーニングを採り入れた授業・演習がどの程度実施されているかを把握し、アクティブ・ラーニングの評価方法および課題について検討する。

III. 調査方法

調査の対象時期：平成29年度（2017年度）

対象者：専任教員

調査方法：質問紙調査用紙ファイルを全教員へ配

* 順天堂大学保健看護学部

* Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing

(Nov. 9, 2018 原稿受付) (Jan. 18, 2019 原稿受領)

信し、提出先を事務の専用アドレスとした。提出者アドレスを削除したデータを回収して集計を行い匿名性を担保した。

調査期間：2018年7月20日～8月4日

IV. アクティブ・ラーニングの定義

「アクティブラーニング」について対象者の認識を統一するため、以下のように定義して調査を実施した。

本調査では、アクティブ・ラーニングを採り入れた授業とは、一方向的な知識伝達型授業ではなく、学生に「書く」「話す」「発表する」などの能動的な活動を促す学習法を採り入れた授業・演習と定義します。

具体的には、発問・応答・挙手をもとめる、クリッカーの使用、コメント・質問の提出および回答、課題やレポートの提出、グループワーク、問題解決型学習 PBL(project/problem based learning)、ディスカッション、ディベート、ブレインストーミング、プレゼンテーション、反転学習などの方法を採り入れた授業・演習です（実習を除く）。

参考資料：

- 1) 平成 27 年度東京成徳大学アクティブラーニングの現状についてのアンケート調査（2015 年 12 月 25 日 AL ワーキンググループ、企画・IR 室）
- 2) アクティブ・ラーニングの現状についてのアンケート調査集計、北海道大学高等教育推進機構徳井美智代、宮本淳、（2015 年 3 月）

V. 結果

専任教員 35 名中 21 名（60.0%）から回答があった。結果は、担当科目数合計 90、アクティブラーニングを実施している科目数合計 73 で、講義科目に関して導入率は 81%であった。アクティブラーニングの具

体的内容、評価、課題について自由記述で回答を求めた。

1) 「具体的内容」についての自由記述

記述された具体的内容をまとめると、①講義内での発問、応答、挙手を求める、②ディスカッション、③グループワーク、④レポート提出、⑤事前課題、⑥リアクションペーパーの活用、⑦各グループにテーマを与え結果をプレゼンテーションする、⑧クリッカーを用いたミニテスト、⑨演習を実施するなどの内容を実施していた。また、科目の中で上記の内容を複数組み合わせ、学生にとって効果的な学習になるよう工夫していることが明らかになった。他の科目で実施している具体的内容を参考にして、自分が担当する授業にも取り入れていくことができると思われる。

①講義内での発問、応答、挙手を求める。

- ・国家試験過去問題を提示し、学生を指名して答えさせている。この時できるだけ教室内を巡回している。
- ・授業中に何名かに壇上に出てもらい一問一答形式で答えてもらう。

②ディスカッション

- ・グループワークではディスカッションをする。
- ・各自の課題を数人の学生でバズセッションし、数グループがクラス全体へ課題の学びを発表する。
- ・3年生、4年生の授業については、症例を提起し、学生間で解決策やアセスメント内容を話あわせています。一定の時間をおいて、何人かに話し合った内容を発表してもらいます。

③グループワーク

- ・グループワークにより地域ケアシステムを考案し、パワーポイントにてプレゼンテーションする。
- ・グループで法律・制度等を学習し、その内容をパワーポイントにてプレゼンテーションする。
- ・事例を提示し看護職者の役割等を整理し、グループワークにて学びを深める。
- ・各グループに健康教育テーマを与え、事前学習、

教案作成、媒体作成、教育ボランティア・学生の前で発表をする。

- ・学外に出向き住民の生活環境等視診し、住民の声を聴取する。
- ・各グループにテーマを与え文献検索をさせ調査票を作成し、学生間で調査をし合い、因子分析を行い、結果をプレゼンテーションする。

④レポート提出

- ・授業中のDVD鑑賞後の意見発表及び感想等のレポート記載。
- ・新生児訪問の演習とレポート。
- ・健康教育の媒体作成と発表会（グループ発表）・レポート提出。
- ・健康教育の他グループの発表への意見・感想。
- ・外部者の健康教育実践への感想記載。

⑤事前課題

- ・事前課題と授業後のリアクションペーパーの提出。
- ・講義前に指定した新聞記事を調べ講義に参加、講義内容とあわせレポート。
- ・演習ノート自己学習後、実技演習への参加。実技演習内での学びを追加してノート提出。
- ・少なくとも1週間前までに授業内容をJ-Passで周知し、予習を促している。

⑥リアクションペーパーの活用

- ・リアクションペーパー（質問記述できる）の質問に回答する。
- ・全体へのフィードバック（講義内での問いかけへの回答記載含む）をする。
- ・『コメント・質問の提出および回答』は担当するすべての授業で授業終了時あるいは授業評価のコメント欄に記載するよう、オリエンテーション時および随時依頼しています。『課題やレポートの提出』は担当するすべての科目で、課しています。また、毎回ではありませんが、シラバスに記載の予習や復習を行っているかを挙手等で確認しています。その

他、学年を対象とした（学生数の多い）科目においては、授業の途中で「バス・セッション」「ブレインストーミング」を積極的に取り入れています。

⑦各グループにテーマを与え結果をプレゼンテーションする。

・学生の調査内容のプレゼンテーション及び学生同士での質疑応答。

・授業の題目や内容に合わせて、次回の事例を提示し、個人課題を宿題として出した後、ビデオ視聴やグループワークディスカッションやディベートを実施して、グループとしての事例課題についてのコメントをグループ課題用紙に書いてもらい、授業中にいくつかのグループに発表してもらい、授業後に提出してもらう。次の授業の最初によく書いているグループの解答を紹介する。

授業の半分はなるべく、このような形式のアクティブラーニングをするようにしている。

・1年生の教養ゼミでは、テーマをもとに1人1人パワポを用いて発表し、それについて意見や質問を他の全員が行い、回答できなかった質問は次回までに調べ学習をし追加発表を行っている。

⑧クリッカーを用いたミニテスト

⑨演習を実施する。

・授業中に時折2、3人でペアを組んで、観察法、診察法の一部を学生同士で施行してもらっている。

さらに、具体的内容で科目名が明記されていた記述を示す。各科目の特徴があり、内容の展開には工夫がみられた。

◆ Writing: ビブリオバトルを実施。

Speaking: 授業で使用するテキストに沿ったテーマでの3分間スピーチを実施。

◆生活援助技術：まず、講義・デモンストレーションを授業で行う。その復習として、ビデオを配信し(CCube)学生はそれを活用しながら技術ノートを作成し、実際

に実習室で自己学習(自主練習)を行うようにしている。次の授業で、まず質問・課題となることを発表してもらってから、実際の演習を行っている。

◆1) 周術期看護の術後日常生活支援

・事前課題(個人):3事例すべての「食事」「排泄」「清潔」に関する援助の要点をまとめる。

・グループワーク、発表:個人課題を基に、1事例のひとつの援助についてまとめ、発表する。

2) 周術期看護における看護診断

・事前学習(個人):授業で展開している事例(胃切除術)について、「機能的健康パターン」のうち、実習上で必須の3パターンの中からひとつを選び、アセスメントし看護診断を導く。

・グループワーク:グループごとに決められた「機能的健康パターン」から看護診断を決定し、そのケアプランを立案しまとめ、発表する。

3) 周術期看護に必要な援助技術演習:呼吸音聴取、ドレーン管理、輸液管理の3技術

・事前学習:提示した学習内容を調べる(提出なし)

・演習:静岡病院の認定看護師3名と教員で、上記演習を各50分ずつ行う。

技術演習と上記2)の看護診断の演習を裏表の授業として組み、約60名ずつに分けて行っている。

4) 授業全般的に双方向の授業を意識し、授業中に「術前オリエンテーション」や「術前呼吸練習」を2人1組での実施、知識の確認や具体的な援助を考える発問をし、教室内を回り多くの学生に答えてもらうことを行っている。

◆在宅で療養する小児の看護

事前課題として、自分のライフイベントを発達段階ごとに記載してくる。講義内で自分自身の過去と未来のライフイベントを時間軸に記載する。在宅で家族と共にライフイベントを過ごすことの意義、在宅で生活するための支援について理解を深める。

パワーポイントに空欄を作り、穴埋させている。

◆チームケア(家族に対するチームケア)

・プレテスト(家族看護に関する過去問題の解答・解説実施)

・3つの事例について、それぞれグループ毎にアセスメント、エコマップを作成し、発表し意見交換する。

・講義後、リフレクションを記載してもらい、出た意見をまとめ、次の時間に発表する。

◆救急救命法の理論と実技では、デブリーフィングに重点をおく授業をおこなっている。

2) 「評価」についての自由記述

評価に関して、①実践している評価方法、②アクティブラーニングの評価が難しい点を示された。各教員は、評価に関して困難を感じながらも、試行錯誤をして教育を実践している状況にあることが明らかになった。

①実践している評価方法:

・学生によるピアレビューを実施している。

・事前課題のレポートをその科目の評価として学生に明確に提示し、評価に組み入れている。演習の翌週にテストを実施し、評価点として加点している。

・授業貢献度に注目して評価している。

②アクティブラーニングの評価が難しい点

評価が難しい点としては、【グループワーク等の評価が困難】【学生側の問題】【長期の評価になる】があげられた。

【グループワーク等の評価が困難】

・グループの成果物では学生個々の評価ができず不公平になる。そもそもアクティブラーニングを評価する必要があるのかがやや疑問。評価の対象となるという時点で受動的な意識が学生に生まれアクティブな学習という趣旨からずれているのではないかと感じる。

・グループワークでは、討議内容やそのプロセスとともに出欠・遅刻・早退と参加度をグループメンバーが記入し、提出するようにしている。教員もラウンドしながら、出欠席や参加度は確認している。これ

を現段階では評価として点数化していないが、最終評価の加点・減点に役立てたいと考えている。以上の点から、評価としては可能であるが、内容によっては難しい。

【学生側の問題】

- ・話し合いに参加しない学生もいる。
- ・寝ていたり、他の授業の課題の内職をしている学生もいる。

【長期の評価になる】

- ・アクティブラーニングを受けた学年の学生が実習の場、あるいは就職してからどのくらいレベルアップしたかが長期の評価になる。
- ・学生がどれだけ身につけることができたのかというものがゴールであり、授業方法に評価は不要である。
- ・評価のポイントを、例えば話せたことそのことを評価するのか（初期はこれが多い）、内容に踏み込んで評価するのか（ある程度慣れてきたら可能）といったように、基準を一つに定めにくいと、結果的にその場の状況に応じて臨機応変に対応するしかないのではないか？
- ・現行の評価(方法)で良いのか？現在のマークシートによる授業評価は効果的でない。

3) 「課題」についての自由記述

アクティブラーニングを実施するためには、①環境の整備が必要、②学生側の課題、③グループワークの課題、④アクティブラーニング実施の体制づくり、⑤アクティブラーニング導入の難しさなどが課題として記述されていた。前述したアクティブラーニングの評価が難しい点【グループワーク等の評価が困難】【学生側の問題】【長期の評価になる】と内容が共通する部分も記述されていた。

①環境の整備が必要

- ・個々人の意見を聞きたいとき（自分ならそんな時どう思うかなどの個人的意見で手を上げにくい問

題)の時は、11番教室はクリッカーが使いやすいですが他の教室では、別の機械を持参したりしなければならぬので使いづらい。

簡単にその場で学生が気軽に参加解答してもらえるように機器を11番教室と統一してほしい。または、その他の教室の場合、事前に申し込んでおけば、すぐに使用できるようにセッティングしておいてほしいです。よろしくお願いいたします。

- ・ICTの活用及び導入をしたいと考えております。
- ・学生の授業評価より、「せっかくとったビデオが学内だけしか見れない。自宅に帰って復習しようと思ってもできないので、学外からもみれるようにしてほしい。」の意見多数あります。アクティブ・ラーニングを推奨しているにも関わらず、本学はICT環境が整っていない。早急にシステムの導入を検討すべきではないでしょうか。

- ・ICTの活用：サポートしてくださる人の確保
- ・クリッカー等の活用もしてみたいと思うが、機器の準備まで余裕がなく、サポートがあると有難い。
- ・演習でもその課題でも計画する上で、教室や実習室使用が他の授業で重なっていないか、重なっている場合には日程か場所を変更する必要があり、実際に教室が使用できずに部分的に断念した計画や、実習室を共同で使用したことがあります。特に年度初めは時間割が確定しておらず、計画が非常に難しい面があります。

②学生側の課題

- ・すべての学生がすべての科目に興味があるわけではなく、学習の動機づけは学生個々で異なる。動機づけできていない学生にとってアクティブラーニングは効率的な学習とはなりえないのではないか。
- ・画一的に自主的な学習を促すのではなく、学生個々が興味のある分野で自主的に学習の方が効果は上がると思う。その場合看護研究との差別化が必要。
- ・グループワークでは必然的にコミュニケーション

能力に依存せざるを得なくなってしまう。集団の意見を集約する際に発表、発言以外のアウトプットの方法があってもいいと思う。

- ・学生の授業に対する意欲がない。そのためにアクティブラーニングを取り入れる必要があるのだろうが、それ以前に授業に取り組む態度（大学生として）が悪い学生いる。少数だがそのような学生に対しての対応。

- ・本学部は学生数が多く、また興味関心とは関係のない必須授業のため、参加しない学生が一定数でると考えられる。

- ・学生間の理解度、能力、モチベーションに差がありすぎ、一部の学生への負担が大きくなる可能性がある。

③グループワークの課題

- ・グループワークを行った際に学生個人の評価についてどのように行ったら良いか。

- ・グループワークが多くなるため、最初のうちはグループを変えてほしいという要望が多い。

④アクティブラーニング実施の体制づくり

- ・学生がどのように授業で学んでいるのか、どんな授業方法を経験しその授業方法で学ぶことについてどんな学生の傾向や課題があるのか、などの情報交換

- ・上記について学部全体で取り組む組織づくりなど
- ・反転（様）授業については1学期に1つでも2つでも増やしていけば、徐々にそれが当たり前になる文化が育っていくのではないかと思う。それが真の Faculty development であろう。

- ・学生が苦手としている形態機能学等でも反転様授業を取り入れてもらおうと、その後の学びがスムーズになるのではないか。

⑤アクティブラーニング導入の難しさ

- ・時間を取られてしまうので、本来の内容が過少になる場合がある。ゆっくりと時間をかけて流れを説

明するような授業は人気がなく、テストに出るところだけを教えてほしいという要望が多くなる。

- ・覚えなければならぬ情報量が多い場合には、知識の定着が難しいと思う。

- ・できれば一部でも反転（様）授業を行ってみたいが、他の科目においても課題（予習復習）が多く出されているようで、学生の負担（教員の負担も）を考えると多くは難しいかもしれない。まずはやる気のある学生を選んで、内容を絞って学生授業を行ってみるか？

- ・教員発問内容や提示した課題の意図が伝わりにくい（教員の能力不足等）時に、意図した解答が得られない場合の修正が難しい。講義の目標設定を明確にしておく必要がある。

- ・現行以上の内容と対象人数で実施するには十分な検討時間が必要（自分の課題ではありますが・・・）

- ・学生にとって、課題が提示される時期は他領域からも示されており、過重負荷となっています。授業をしていても他の領域の課題をやっており、同様に他の授業では成人の課題をやっていること考えます。本来、授業に集中して欲しく本末転倒ですが、学生は「切羽詰まって仕方ない」と授業評価に書いています。結局は、授業に集中せざるを得ない授業を展開するしかないと考えます。他方、このような問題点をカリキュラム改正の時期ですのでFDで取り上げ、全学的にアクティブラーニングと関連づけて検討できると良いのではないのでしょうか。

- ・問題解決型学習やディベートを講義に取り入れたいと思っているが、なかなか方法が分からず取り入れることができないため、可能であれば講義に取り入れている他領域の授業に参加し学んでいきたい。

- ・アクティブになるための基礎知識をどのように補充し、そこからの思考展開をどのように支援するのか。知識前提で考えると、学生の主体性は授業以外のところで発揮してくれることをまず期待してしま

うが、それだとアクティブさを評価できなくなると
いうジレンマがある。

VI. おわりに

今回、授業および演習に関してのアクティブラーニング実施状況を調査して、教員が実施方法や評価について様々な創意工夫と試行錯誤をしながら、限られた時間と人員の中でアクティブラーニングに取り組んでいる姿が浮かび上がってきた。

また、アクティブラーニング実施の難しさを抱えながら、教員個人の教育スキルを向上させ、ICT環境を整備する必要性や、科目間での情報交換といった全体の体制づくりに関するニーズが明らかになった。FD委員会では、今年度のFD研修会テーマを継続していく中で、このようなニーズに対応していく必要があると示唆を与えられた。

謝辞

御多忙な時期に調査にご協力をいただいた先生方に心より感謝申し上げます。

誠に有難うございました。